

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	『伽婢子』に見られる「情」の表現について：「牡丹灯籠」を中心に
Author(s)	楊, 媛
Citation	国文学攷, 255 : 43 - 52
Issue Date	2023-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054789
Right	本誌に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属します。
Relation	



『伽婢子』に見られる「情」の表現について

——「牡丹灯籠」を中心に——

楊

媛

はじめに

寛文六年（一六六六）に刊行された『伽婢子』は、浅井了意が『剪刀新話』『剪刀余話』『金鰲新話』に基づいて創作した翻案小説である。各話の典故は、宇佐美喜三八氏¹・黄昭淵氏²の研究を中心としてほぼ明らかにされているが、各話の比較または了意の翻案の意図に關する研究が今も続けられている。

『伽婢子』の六十八話は幽霊譚・軍譚・奇談に分類され、この中で幽霊譚は論じられることの多い部分である。幽霊譚の中でもっとも有名な話は卷三の三「牡丹灯籠」であろう。従来の主な研究は、了意作の文芸性を強調するもの³、及び創作の目的は仏教宣揚であったという観点を打ち出したものである⁴。張龍妹氏と桑子めぐみ氏は共に「牡丹灯籠」が恋愛を中心とした話であると指摘した。桑子氏

は、さらに典拠との比較を通して主人公の新之丞の感情表現を取り上げた。ところが、作中で新之丞は、亡霊の弥子から「うすき情の色みえたり」と、その薄情さを糾弾されることとなる。主人公の「情」の有無を観点として、主人公の設定の意味を改めて考察する必要があるのではないか。本稿は、先行研究を踏まえながら、「牡丹灯籠」を中心として、『伽婢子』の「情」の表現を探究し、その上で了意の「情」に対する考え方も明らかにしようと考ええる。

一、「牡丹灯籠」の「情」の表現

「牡丹灯籠」は『剪刀新話』の「牡丹灯籠記」の翻案小説である。了意の翻案は、主人公の喬生を萩原新之丞、符麗卿を二階堂弥子に改変して、日本の盃蘭盆を物語の舞台としてこの翻案小説を展開した。了意はまず話の冒頭部分に亡妻への思念を加えている。

「牡丹燈籠」

天文戊申の歳、五条京極に荻原新之丞といふものあり。近きころ妻にをくれて、愛執の涙袖にあまり、恋慕のはのほむねをこがし、ひとりさびしき窓のもとに、ありし世の事共思ひつゞくるに、いとかなしきさかぎりもなし。「聖霊まつりのいとなみも、今年はとりわき此妻さへ、なき名の数に入れる事よ」と、経よみ、急かうして、つゐに出てもあそばさず。友だちのさそひ来れども、心たゞうきたゞず、門にたゞすみ立てうかれおるより外はなし。

いかなれば立もはなれずおもかけの身にそひながらかなしからむ
とうちながめ、涙を、しぬぐふ。(七七〜七八ページ)

「牡丹燈籠」

至正庚子の歳、喬生と云ふ者の有り。鎮明嶺の下に居れり。初めて其の耦を喪ひて、鰥居無聊、復た出でて遊ばず。但門に倚りて佇立するのみ。(四三七ページ)

この部分に関して、太刀川清氏は、

「愛執の涙」「恋慕のはのほ」のことは亡き妻への慕る思いの激しきがあり、さらにこのあとは、「いかなれば立もはなれずおもかけの身にそひながらかなしからむ」の歌まで詠ませ、その感情の高ぶりとは裏腹にむすばれる心の内をも見せもして

いるのである。

と評価した。また桑子氏は、

主人公の妻に関して「牡丹燈籠」では喬生の妻の記述は極めて少ない。一方、「牡丹燈籠」では細かく妻への感情が描写され、新之丞の亡き妻への深い愛情と未練が読み取れる。

と記した。つまり太刀川氏・桑子氏は、この描写を通して、新之丞が「情」のある人間として読者に受けとめられるようにしたと言いたいのだろうが、それは正しいだろうか。これほど妻を失った悲痛に浸った新之丞であるのに、月下で美しい弥子を見ると、妻への思いをすっかり忘れて、弥子を誘って一緒に家に帰ることになった。二人で一夜を過ごした後の新之丞のありさまは、以下のようにあった。

「牡丹燈籠」

すでに横雲たなびきて、月山のはにかたぶき、ともし火白うかすかに残りければ、名ごりつきせすおきわかれて帰りぬ。それよりして日暮れば来り、明がたにはかへり、夜ごとにかよひ来る事、更にその約束をたがへず。荻原は心まどひてなにはの事も思ひわけず、たゞ此女のわりなく思ひかはして、「契りは千世もかはらじ」と通ひ来るうれしきに、昼といへども、又こと人に逢ことなし。かくて廿日あまりにをよびたり。(八〇ページ)

「牡丹灯籠」

天明け辞し別れて去る。暮れに及べば則ち又至る。是の如き者の將に半月ならんとす。(四三七ページ)

右に示した通り、了意の翻案は原典を踏襲した上で新之丞が夢中になったさま傍線部を加えた。この部分に関して坂巻甲太氏は、

かくして女は夜毎に來りて明け方に歸り、それが二十日余りに及んだ。新之丞はいっそう女に心を奪われ感うのであった。

と指摘した。確かにこの部分で新之丞の弥子への恋慕はますます深くなった様が窺えるが、この様子により、女色に耽る新之丞の、亡妻に対する心が変わったことも確認できるであろう。言わば了意は、こここの描写を通して、弥子への「情」のある様子を強調しながら、亡妻への「情」のない様子をも暗示したと考えられよう。

続いて新之丞は、隣の翁から弥子の正体(亡霊)を知らされ、怖れる故に自宅にも戻れなくなる。隣の翁から、卿公の力を借りれば無事になると勧められて、新之丞は卿公の所から二つの符を求めて一方的に弥子と別れた。この行動はまるで亡妻への「情」のない仕打ちが再現されたかのようなのである。後、二人が再会する場面は以下の通りである。

「牡丹灯籠」

五十日ばかりの後に、ある日荻原東寺にゆきて卿公に礼拝して、酒にえひて帰る。さすがに女の面かけこひしくや有けん、万寿

寺の門前ちかく立よりて、内を見いれ侍べりにしに、女たちまちに前にあらはれ、はなはだ恨みていふやう、(八四ページ)

「牡丹灯籠」

一月有餘りて、袞繡橋に往き、友を訪て留飲す。酔に至って都て法師の戒を忘れ、逕ちに湖心寺の路を取て、以て回る。將に寺門に及ばんとす。則ち金蓮迎へて于前に拜するを見、曰く、(四三八ページ)

この部分に関して張氏は、

男がついに幽霊に殺される原因について、「牡丹灯籠」は「一月有余、袞繡橋訪友。留飲至酔、都忘法師之戒、逕取湖心寺以回。」とあくまでも偶然の過ちであるのに、「牡丹灯籠」ではさすがに女の面かけこひしくや有けん、万寿寺の門前ちかく立ち寄りて……などと、幽霊に恋を覚えたような描写をしている。

と評した。確かに新之丞が万寿寺を通る理由は原典と異なり、愛慕の心が再び燃える事による自発的な行動である。ただ、この愛慕の心に対して弥子の態度は以下の通りである。

「牡丹灯籠」

「此日比契りしことの葉の、はやくもいつはりになり、うすき情の色みえたり。はじめは君が心ざしあさからざる故にこそ、我身をまかせて、暮にゆき、あしたにかへり、いつまで草のいつまでも絶せじとこそちぎりけるを、卿公とかやなさげなき隔

のわざはひして、君が心を余所にせしことよ。今幸に逢まいらせしこそうれしけれ。こなたへ入給へ」とて、萩原が手を取り、門よりおくにつれてゆく。(中略)萩原すでに女の墓に引こまれ、白骨とうちかきなりて死してあり。(八四ページ)

この部分に関して太刀川氏は、

金蓮に「何ゾ一向薄情是ノ如クナル」と語らせ、符女にまた「妾君ヲ恨ルコト深シ」と言わせる激しい恨みの感情は「牡丹灯籠」の弥子には全くない。弥子が王朝物語の中に彷徨する女なら、日本の物語の伝統としての「待つ女」にならなければならない。

(中略) それにしても「牡丹灯籠」の符女に見られた「恨み」の情念は、ついでこの弥子にはなかったのである。

と指摘した。確かに発言から見れば、弥子の怨恨は符女ほど深いものではなかった。但し、「うすき情の色みえたり」「卿公とかやなまけなき隔のわざはひして、君が心を余所にせしことよ」の表現によって、新之丞の薄情を恨む気持ちは符女と共通していた。つまり弥子に対して新之丞がどれほど「情」のある様子を表現しても、彼は確實に「情」のない者であった。新之丞の死に関して坂巻氏は、

果たして現れ出た彌子は怨み言の数々を述べて新之丞を責める。(中略) そして新之丞の手をとり棺の内に引き入れたのである。新之丞の裏切りに対して報復したのである。

と評した。確かに新之丞の死は弥子の復讐であるが、彼の死に関し

て了意がどのような意識を持っているかは、探究する必要がある。『伽婢子』の恋愛譚で女により命を落とす話は「牡丹灯籠」のみと見られるが、万治三年(一六六〇)に刊行された『可笑記評判』巻一・第廿一「愛欲はきりがたき事」^[5]の中で、女により地位・名声あるいは力を失った者を取り上げられた。『可笑記』の記述を受けて、了意は以下のような評を加えている。

評曰、(中略) 世の常の人は、愛欲にそまりては身命をうしなふ。いはんや後世をとりそこなひて、行徳をむなしくせし、そのためし三国にわたつてすくならず。

ちかくわが朝のむかし、道命法師が名をながし、真濟僧正の紺青鬼となりけるたぐひ也。たゞ本心をみださず、みだりならざるは聖賢にちかし。もし心をみだし、非道をおこなひ、身命をうしなふに及ぶともがらは、秋の鹿・夏の虫・春駒・山獺の愚畜の類に等して、替るべからず。争か人といはん。能つ、しむべし。(四八ページ)

「世の常の人」は、「愛欲」により命を失うことがあるという。また、「心をみだし、非道をおこなひ、身命をうしなふに及ぶともがら」は人間ではないともいう。この断言はそのまます新之丞にも向けられていると見てよいのではなからうか。彼は月下で弥子に一目惚れする。しかし弥子の正体(亡霊)を知らされると、すぐに逃げてしまう。再会する時に弥子に殺されるが、これはまさに「愛欲」により命を

落としたことになる。おそらく了意は、新之丞の死を通して、読者に愛欲にそまることの恐ろしさを伝えようとしたのではないかと考えられる。また、「たゞ本心をみださず、みだりならざるは聖賢にちかし」と、理想的な人物像をも提示してみせる。このような人は、「非道」をしないし、命を落とすこともないであろう。

了意の翻案は、「情」のない者が命を落とす描写を通して、「愛欲」の恐ろしさを読者に伝えながら、「心」の持ち方をも読者に考えさせることを目的としたのであろう。

それでは、『伽婢子』の他の話の「情」はどのように表現されているのだろうか。

二、他の話に見られる「情」の表現

『伽婢子』の六十八話の中で、主人公の「情」に触れた話としては、「牡丹灯籠」以外に九話がある。各話の「情」を記す部分は以下の通りである。

①巻一の二「黄金百両」

河内国平野と云所に、文兵次とて有徳人あり。しかも心ざし情ある者也。(二五ページ)

②巻三の一「妻の夢を夫面に見る」

周防山口の城主大内義隆の家人、浜田与兵衛が妻は、室の迫の遊女なりしが、浜田これを見そめしより、わりなく思ひて、

契りふかくかたらひ、つゝにむかへて本妻とす。かたちうつくしく、風流ありて、心ざま情深く、歌のみちに心ざしあり。手もうつくしう書けるが、しかるべき前世の契りにや、浜田が妻となり、たがひに妹背のかたらひ、此世ならずぞ思ひける。(六一ページ)

③巻四の二「夢のちぎり」

大永の比ほひ、船田左近といふものあり。武門を出て凡下となり、山城の淀といふ所にすみけり。心ざま優にしてなざけなく、しかも無双の美男なり。(二〇六ページ)

④巻五の三「焼亡有定限」

西の京に、富田久内といふものあり。わかきときより、なざけふかく、慈悲あつき心ざしあり。(二四二ページ)

⑤巻六の三「遊女宮木野」

宮木野は、駿河の国、府中の旅屋にかくれなき遊女なり。眉目かたちうつくしく、手よかくきて、歌の道に心をかけ、情の色ふか、りければ、近きあたりの人これをしたひ、風流のともがらことごとくこれになれざるをうらみとし、好事のものみなこれにちぎらざるを恥とす。(二六六ページ)

⑥巻七の四「中有魂形化契」

(前略) 記内は幽霊と聞ながらも、このほどの情をおもふにおそろしげはなく、たゞかなしき事かぎりなし。(二〇二ページ)

⑦巻八の三「歌を媒として契る」

(前略) むすめたゞ一人もちたり。牧子と名づく。年十六七ばかり、かほかたち世にたぐひなく、絵かき・花むすび・たちぬふことに手きゝて、しかもよろしからねども歌の道に心をかけ、情の色ふかく、花にめで、月にあくがれ、紅葉の秋、雪のゆふべ、折にふれ事によそへて歌よみうそぶきて、心をいたましむ。(二三五ページ)

⑧巻九の三「金閣寺の幽霊に契る」

(前略) 主水正あはれにもかなしくて、家にかへらん事をわすれ、又その夕暮に闇のほとりに立めぐれば、女房もあらはれ出て、手をとりくみ涙をながしてかたるやう、「みづから君が心の情を感じて、たゞその夜ののちぎりをなし、かづらきの神かけて、昼をいとふぞ心うき」などいひければ(後略)(二七〇ページ)

⑨巻十二の一「早梅花妖精」

そのころ村上頼平の家人埴科文次といふもの、心ざまなきけふかく、武をまなぶいとまには敷島の道をしたひ、軍陣の砌にも陣所の風景おもしろき所にては、一首をつくりて思ひをのべ、諸軍の興をもよほさせけり。(三三九ページ)

すべての「情」と関わる描写は了意によって付加されたものである。また、各話の主人公の結末は以下の通りに描かれている。①の主人公は、戦争から逃れて生き続けられる。②の主人公の妻は、夢

の中で夫と再会できた。③の主人公は、夢の中で恋した女と再会できた。④の主人公は、火災の直前に家財を持ち出して、自分も火災から逃れた。⑤の主人公は、貞節と孝行の行いにより天帝地府に褒められて、男子として転生した。⑥の主人公は、妻を失って悲嘆に暮れ、葉をも飲まず、ほどなく病死した。⑦の主人公は、貞節を守るためにみずから死を求める所為が天帝を感動させ、夫と再会する機会を与えられた。⑧の主人公は、妻として迎えた幽霊の女房を失った悲痛により官職を辞し、亡くなるまで小原の奥に引きこもった。⑨の主人公は、生きる希望を失って、翌日戦死した。

情深い人柄により、①～④の主人公は、生きたまま希望を叶えられる。⑤・⑦の主人公は生前の所為により天帝に褒められ、願いを叶えられる。⑥・⑧・⑨の主人公の結末部には、希望を叶えられる描写こそないが、ともに愛する人への思いを全うすることができた。つまり了意はこの九話を通して、誠の「情」のある者のありようを読者に伝えようとしたのであろう。

また、九話の中で、人と幽霊の恋を描いた話は二つある。⑧の主人公は既に初対面の時に相手が亡霊であったことを知っていた。⑥の主人公は、新之丞と同じように、話の途中で愛した人が亡霊であったことを知る。⑥の主人公の設定は新之丞と同じである。しかし、両話の結末には決定的な違いがあった。すなわち亡霊に対する主人公の態度である。新之丞の態度に対して塚野晶子氏は、

卷三ノ三「牡丹灯籠」の萩原新之丞は夜毎に通ってくる女の正体が亡霊と判明するや否や、「身の毛よだちておそろしく」と、後も見ずにその場を離れている。これは極めて正常な人間の反応である。(中略) しかし「不敵もの」の主人公たちは、怪異を目のあたりにしても「すこしもおどろかず」と、恐怖の表明は一切していない。それどころか怪異に積極的に関与したいという欲求が、自己保存本能を凌駕している。心の動きが、どこか正常ではない。

と論じている。「不敵もの」について、塚野氏は「怪異・超常現象に対する恐怖・畏敬の念が欠落しているということになる。」と述べていた。確かに塚野氏が指摘した通り、弥子の正体を知らされた新之丞が、亡霊の側から逃れるのは、自己保存本能のあらわれである。しかし、⑥のような「不敵もの」の主人公が、亡霊の側から逃げないのは、異常ではなく、亡霊が齎した恐怖より、目の前の人は自分が恋した人であったという考えが優先され、恋人との「情」を思い出したからである。同様のパターンで二つの異なる結末を描き出すのは、おそらく情深い人柄の意義を強調するためであろう。

ところで、①②③④⑤⑥⑦⑧の八話は地の文で主人公の「情」のある様子を説くものである。⑧は幽霊の女房の発言を通して主人公の「情」を表現するものであったが、この「みづから君が心の情を感じて」の発言は、主人公の「情」を最愛の相手が保証するもので

ある。この点で、⑧の主人公の「情」は他の八話と共通していると考えられる。

三、了意の「情」に関する考え方

ここまで、「伽婢子」の「情」を記した部分を取り上げて、各主人公の「情」のある様子と「情」のない様子を分析した。それでは、『伽婢子』以前に成立した了意の作品の中から、「情」に関する記載を探ってみよう。『可笑記評判』に以下のようにある。

『可笑記評判』巻四・第十一「慈悲に大小ある事」

評曰、儒教には仁といひ、仏書には慈悲といふ。ともにあれみをほどこすをいふ。(中略) 側隠恍惚は仁の端也といへり。わづかなる所にはあれみのおこるうへは、大なる所にいたつてあはれみの心おこるべき事、理の前也。(一六〇ページ)

『可笑記評判』巻八・第十八「同類相友なふ事」

次に、情は慈悲の端なり、情より慈悲を生ずといへる事も心得がたし。例せば、側隠恍惚は仁の端なりといへり。されば物をあはれみ、情をかるといふも、みなもとは慈悲より生ずと知べし。(三三五ページ)

『可笑記評判』巻十・第十三「慈悲は人に依てすべき事」

評曰、儒教には仁と名づけ、仏道には慈悲と名づく。(中略) 莊子に、虎狼も仁ありて、父子は相くらはずといへり。おそろ

しき虎おほかみも、親と子はくらはぬ也。人として親をいとしみ、子をかはゆがり、夫妻したしくあるをもつて、大なる仁とは名づけがたし。(四二五ページ)

『可笑記評判』巻四・第十一と『可笑記評判』巻十・第十三は、儒教の「仁」と仏教の「慈悲」を同等に扱う文言を有する。そして巻八・第十八「同類相友なふ事」には「情は慈悲の端なり」と述べる。「情は慈悲の端なり」という考えは、『孟子』の「惻隱之心、仁之端也」という説に対応する。

「情」をどのように実現するかに関して、了意は『可笑記評判』巻十・第十三の中で、家族への気遣いは大きな仁ではないと述べていたが、『可笑記評判』巻四・第十一には「わづかなる所にあはれみのおこるうへは、大なる所にいたつてあはれみの心おこるべき事、理の前也」と説く。すなわち、慈愛・情愛をもって家族に接するところが「情」の出発点であり、この観念を持っている者が、広く他者に対して慈悲を施すことができると考えたのであろう。了意は、「情」の要素を累加した作品を通して、「情」の大切さを読者に提示すると同時に、家族に対する情愛から出発するという具体的な方法をも読者に伝えようとしたと考えられる。この観点からすると、「牡丹灯籠」の新之丞は、情愛の乏しい、愛欲に身をまかせただけの好ましからざる人間ということになろう。

四、まとめ

上記のように、了意の翻案には典拠を踏襲する上で「情」を強調する特性が窺われる。そして「情」のある者が「非道」をしないという共通点が見られる。また、この「非道」をしないという人物設定は、『伽婢子』の序文に記した「正道」を連想させる。序文の該当箇所は以下の通りである。

然るに此伽婢子は、遠く古へをとるにあらず。近く聞つたへしことを載あつめてしあはらずもの也。学智ある人の目をよろこばしめ、耳をすゝぐためにせず。只兒女の聞をおどろかし、をのづから心をあらため、正道におもむくひとつの補とせむと也。

傍線部に示した通り、『伽婢子』の創作には読者を正道に導く意図がある。但し、了意の勸善は決して善行を勧めるだけではないと考えられる。新之丞の設定の意味がここにあった。

【注】

(1) 宇佐美喜三八「伽婢子に於ける翻案について」(宇佐美喜三八『和歌史に関する研究』(若竹出版、一九五二年十一月)。「和歌史に関する研究」復刻刊行会より一九八八年七月に復刻版刊行)所収。

(2) 黄昭淵「伽婢子」と叢書『五朝小説』を中心にして(『近世文芸』六十七号、一九九八年一月)。

(3) 富士昭雄「伽婢子―怪異と超現実へ」(『解釈と鑑賞』四十五巻九号、

一九八〇年九月)「むしろ『伽婢子』では、原話『新話』の後半にある道教臭の応報譚をすっぱりと削除して、新之丞をめぐる愛執の怪異譚にとどめているのは、この作品が単なる唱導・説経の說話の域にとどまらず、すぐれた文学にまで形象化するのに成功したものと見える。」江本裕『伽婢子1・2』(平凡社、一九八八年二月)解説『伽婢子』の文詞の艶麗さを説いたとは思わぬが、少なくとも作者が中国臭を払拭するに成功していること、また相当程度潤色がなされて独自の形象を得るに至っていることは了解されたと思う。」(一八七ページ)以下、先行研究の掲出にあたっては、単行本の場合のみ、該当ページを明記する。

(4) 富澤慎人「時代を超えて生き続ける怪異―伽婢子―」(『アジア遊学125 アジアの怪奇譚』勉誠出版、二〇〇九年八月)「しかし了意は、『牡丹灯籠』の結末で、新之丞の一族に一千部の法華経を読ませ、写経をさせている。追善供養することで新之丞と女がこの世に迷い歩くことがなくなり成仏したと説き、仏教色の強い回向談に改変しているのである。」、湯浅佳子『伽婢子』の仏教説話の世界―教養としての儒仏思想の浸透―(鈴木健一編『浸透する教養―江戸の出版文化という回路』勉誠出版、二〇一三年十一月)「本話は、原話の鉄冠道人による悪霊膺懲の話、仏による悪霊消滅の話へと変容させ、物語を仏教的世界に置き換えている。」(二六五ページ)、北島晶子「翻案小説集としての『伽婢子』」(『国文』三十八号、一九七二年十二月)「中国の怪異譚は道教を背景に持っているが、日本では仏教思想が基調により、道教の世界と置き換えられている。最も顕著な例は『牡丹灯籠』(三〇)だ。」。

(5) 張龍妹「東アジアにおける漢文化受容の側面―『剪刀新話』の場合―」(立教大学『21世紀の日本文学研究』報告書…立教大学日本文学科創設五〇周年記念国際シンポジウム)立教大学日本文学専修、二〇〇六年

十一月)「(前略)このように『伽婢子』における「冥婚」譚は、あの恐ろしい『牡丹灯籠』の話まで恋物語に改変しようとしているように、純愛の話を実に翻案するか、そうでない話を純愛の物語に書き換えるかにしていることが一目瞭然である。」。

(6) 桑子めぐみ『剪刀新話』(『牡丹燈籠』に関する一研究)(『語学と文学』第五十号、二〇一四年三月)「(前略)ここまでの比較から考えると、『牡丹燈籠』は主人公の恋愛感情の記述が多いことから、『牡丹燈籠』よりも恋愛を中心とした作品といえるだろう。」。

(7) 『伽婢子』の引用は、松田修・渡辺守邦・花田富二校注『新日本古典文学大系 伽婢子』(岩波書店、二〇〇一年九月)の本文による。引用に際して、振り仮名は省略するのを原則としたが、必要に応じて残す場合もある。また、濁点を補い、私に傍線を施した。

(8) 「牡丹灯籠」の引用は、注7所掲書所収の『剪刀新話句解』の影印により、適宜訓点を補う形で書き下して示した。また、私に傍線を施した。

(9) 太刀川清『牡丹灯籠の系譜』(勉誠社、一九九八年三月)(三六ページ)。

(10) 注6に同じ。

(11) 坂巻甲太「了意怪異小説試論(その八)―近世怪異小説論の基礎稿として―」(『就実論叢』第十七号、一九九八年二月)。

(12) 注5に同じ。

(13) 注9 所掲書四四ページ。

(14) 坂巻甲太「死生交婚譚 その三―『牡丹灯籠』―」(『浅井了意 怪異小説の研究』新典社、一九九〇年六月)(二七五―二七六ページ)。

(15) 『可笑記評判』の引用は、浅井了意全集刊行会『浅井了意全集 仮名草子編3』(岩田書院、二〇一一年五月)の本文による。

(16) 塚野晶子『伽婢子』の方法 異界に翻弄される人間―(『近世文芸 研究と評論』第六十七号、二〇〇四年十一月)。

(17) 注16に同じ。

(18) 『孟子』の引用は、長澤規矩也編『和刻本経書集成 第四輯』（汲古書院、一九七七年四月）の本文による。（二九四ページ）。

——よう・えん、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学——